
オールレディ

都市耿介

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

オールレディ

【コード】

N0916E

【作者名】

都市耿介

【あらすじ】

いじめられっ子の尚美が自殺してから数日後、彼女をいじめていたクラスメイトが何者かに殺害される。死んだ尚美の復讐か？最後に待っていたのは……。初の連載作品！「政吉とマサヨシ」「爆走レース」もよろしく！

第1部 自殺

夜。

私は今逃げている。後ろから迫っている危機から。町中を逃げ回った後、自宅に駆け込む。だが親がおらず、結局は自分の部屋に隠れるしかなかった。扉の鍵を閉めて、あいつが来ないことだけを祈った。

しかし祈りは通じず、あいつは扉をすり抜けて、私を窓のベランダまでに追い詰めた。

私は死ぬことへの恐怖感でいっぱいになる。

「お願い！ もうやめて！ 謝るからさ！ 私を殺さないで！」

だがあいつは私のことを許してはくれなかった。あいつの両手が私の体に触れる。

「・・・・・・・・」

気がつくとも私は地面の上に仰向けになっていた。あいつに突き落とされたのだ。命に別状はないようだが、あいつに殺されることに違いない。

私は死ぬ。

そう確信した頃に、あいつが目の前にいた・・・・・・・・。

某月某日、土曜日。

この日は、おととい亡くなった照澤尚美の葬式が行われていた。会場には彼女の家族や親戚がたくさんいた。全員、涙を流している。だが唯一、そんな悲しみの涙を流さなかったのは、彼女のクラスの女子生徒だけであった。

「葬式って面倒よねー」

田畑菜穂は担任がいないところを狙って、小声で友人らと会話を交わす。

「ていうかウザイよね」

「あいつの葬式だもんね」 そう返してきたのは、ギャルみたいな風貌の新島真理亜と派手なメガネをかけた笹本優だ。

真理亜は赤茶に染まった髪をいじりながら言った。「あいつ、死んでよかったよね」

菜穂、優も同感だ。

「そうよね」

ここで菜穂は、少し前のことを思い出していた。尚美が死ぬ前のこと。

きっかけは、菜穂たちが通っている高校に尚美が転入してきたときだった。彼女は口数が少なく、周りが声をかけても返事すらしなかった。そんな彼女が気に入らなかったのだろう。真理亜が尚美をいじめ始めると、ほかの女子メンバーも彼女をいじめめるようになった。

尚美は不幸な転入生となってしまう。毎日ゴミを投げられるのは当たり前。毎日私物を隠されるのも当たり前。教科書に落書きされるのも当たり前。

彼女は女子の中で孤独状態に陥った。

だが彼女には強い味方がいた。先生と男子だ。先生はともかく男子まで味方に着くとは予想外だった。尚美は顔とスタイルが抜群のためか、あるいは性格が気に入ったのか、とにかく尚美の味方になっていた。その証拠に真理亜が教室で尚美をいじめていると、男子メンバー全員が彼女をかばったのだ。

真理亜から報告を聞いた菜穂たち。彼女たちは尚美への嫉妬心の色に染まる。そこで彼女たちは先生や男子たちの目を盗んでから、尚美をいじめることにした。そして、尚美がトイレにいるところを狙っていじめを開始した。

さすがにトイレまでには、誰も尚美に手を差し伸べてはくれなかった。尚美は菜穂たちのストレス発散の道具に使われる。

いじめは次第にエスカレートしていく。時間が過ぎることに先生や男子たちも彼女を無視するようになっていった。なので菜穂たちは、男子たちがいる教室でも、尚美を堂々といじめていた。そしてその3カ月後。

尚美は自分の人生を捨てた。彼女は校舎の女子トイレの中で首を吊っていた。

彼女の苦の人生。

尚美は死んでいくときに、さぞかし私たちを恨んで逝ったのだろう。

菜穂は頭の中でそう思っていた。別に後悔はしていない。むしろ、満足している。クラスの邪魔者が消え去ったから。

しかし、菜穂には思いも及ばない恐怖が迫って来ていた。

それはまさに死を意味していた。

第2部 前触れ

次の日。

尚美の同級生たちは普通に学校に出かけた。まるで彼女が死んだことを忘れたかのようだ。もはや誰1人として、尚美のことを口にしなかった。彼女は過去の人物として生徒たちの無数の記憶の中に吞まれていった。

菜穂、真理亜、優は学校からの帰り道でべらべらと喋りながら歩いていた。

その会話の中でも誰も尚美のことを口にしない。唯一真理亜が言ったのが、葬式ウザかった、ぐらいのため口だけで後は何もなかった。

「ねえ、この後どうする？」

優が2人に尋ねる。最初に答えたのは真理亜。

「買い物行こうよ。近くのアーケードに行つてさ」

優は賛成するが、菜穂は浮かない顔をしていた。それを見た真理亜。

「菜穂、どうしたの？」

菜穂は正直に答えた。

「ごめん、今日は隆雄くんと一緒にデートの約束をしちゃって」

最初は何を言われるか不安だったが、2人は笑顔を浮かべる。

「なんだ、デート？ 頑張りなよ！」

「彼氏に振られないようにね！」

そう言っている2人。

「本当にごめんね」

「いや、いいよ」

「頑張りよ」

3人は公園の前で別れていった。菜穂は2人が去ったところを見

届けた後、さきほど彼氏から送られた待ち合わせの場所に向かった。近所の本屋。店の前で菜穂は彼氏を待つ。

数分後。

「菜穂」

男性にしては落ち着いた声であった。振り向くと菜穂の彼氏である尾崎隆雄が彼女に手を振る。

「隆雄くん」

菜穂は喜びを噛みしめながら、隆雄に近づいた。

「ちよつと、遅かったね」「ごめん、部活から抜けるのに時間がかかってさ」

2人はそこで笑い合う。

「じゃあ行こうか」

隆雄が積極的にデートを進める。彼は何でも積極的であった。菜穂と隆雄は同じ学校で同じバドミントン部。菜穂は彼と同じ学年のためよく一緒に練習をしていた。それがきっかけで彼とは友好関係になり、そこからの付き合いが積み重なり現在に至る。

はつきりとした恋人関係ではないが、それでも菜穂は満足していた。

2人は近くにある若者向けのブティックに入った。若者が好むと言っても女性向けの店だが。

菜穂は入ってすぐにアクセサリー売り場に向かった。

「あまり高いのは選ぶなよ」

「わかってる！」

彼女は物色を始める。どれも手頃な値段でデザインがよかった。

「決まったかい？」

「うん、これ」

菜穂が選んだのは、ハートの形をしているキーホルダーだ。証明の光でシルバーに輝いていた。

「600円。いいよ」

隆雄は彼女が選んだキーホルダーを受け取り、それをカウンター

に持っていき支払いを済ませる。

「はい、これ」

隆雄は袋に包みこんだキーホルダーを尚美に渡す。「ありがとね」
「俺のときは何か買ってくれよ」

「どうしようかな」

2人は店を出た後、一緒に通りを歩きながら会話をした。

それから1時間後。

2人は近所の公園にいた。ブランコに乗って楽しげな会話を続けていた。

すると、隆雄は自分の腕時計を見た。

「ごめん。俺そろそろ帰らないといけない」

「じゃあ、またね」

「おう、また学校で」

そこで2人は別れた。菜穂は自宅へと向かう。

彼女は自宅の帰り道で笑顔を浮かべていた。もはや彼女は隆雄に夢中であった。だが菜穂は笑顔を浮かべるのを止める。

それは後ろから何者かの気配を感じたからだ。

菜穂は恐る恐る後ろを振り向いた。

「！」

彼女は言葉を失う。なぜなら、彼女の目の前に死んだはずの尚美がいたからだ。

尚美の顔はとてもじゃないほどボロボロだった。半分腐っているように見えた。

そんな彼女の腐った唇が動いた。

「私のことを覚えているのね？」

菜穂は恐怖で身動きが取れずであった。すると尚美が思いがけない言葉を発した。

「今日から人を殺すからね」

そう言った後、尚美はまるで幽霊のように消え去っていった。

オールレディ

菜穂はようやく体に自由が聞き始め、自宅に逃げるように駆け込んでいった。これがまさか、彼女自身の人生の前触れになるとは誰も知りよしもなかった。

第3部 友人の死

午後11時。

菜穂は夕食を食べているときや勉強をしているとき、テレビを見ているときもずっと尚美の言葉を考えていた。

今日から人を殺すからね。

まさか尚美が怨霊となつて、今までに受けていた借りを返すと言うのか？ これまでの恨みを晴らしてやるというメッセージなのか？

あの尚美の顔……。。夢に出てきそうだ。脳裏に焼き付いて忘れられそうにない。

一体なぜ菜穂の前に現れたのか。彼女自身も知りよしもなかった。尚美が一番憎んでいるのは真理亜だろう。いじめの実行犯でもあるし、直接彼女に手を下すこともよくあった。

化けて出るならば、真理亜の前に現れてもおかしくないはずだ。

だが尚美は菜穂の前に現れた。

「何か理由があつて私に言った……。」

菜穂は部屋の窓から外を見る。景色は全部、夜の雨に変わっていた。外の空間が全て雨の音に埋め尽くされる。

菜穂の脳裏にまたもやあの言葉が蘇る。

今日から人を殺すからね。

午後11時。もうすぐ深夜だ。やや眠気を感じる。

優は自宅の部屋の中でMDを聞いている。彼女は必ず眠る前には自分のお気に入りの曲をこうして聞いているのだ。

最後の1曲が終わった。優は耳につけていたイヤホンをはずし、ベッドの布団の中に潜る。メガネはベッドのそばにあるガラステーブルの上に置いた。

すると、どこからか音が聞こえてきた。それはとても小さな音で優の聴力ではやっと聞き取れるほどの大きさであった。

しかしその音がだんだんと大きくなって行くのだ。「何なの・・・」

優は恐ろしさのあまり、ベッドから立ち上がった。彼女はその音が聞こえてくる方向を辿る。その先は部屋の扉。

優は部屋の外から聞こえてくる音を確認するため、扉をそつと開け隙間を作った。優は隙間に顔を近づけ暗い廊下に目を凝らした。

すると扉の隙間からナイフの刃が飛び出てきたのだ。優は反射的に避けて目に刺さらずに済んだが、右頬にナイフの刃が深く刺さった。彼女は激痛で悲鳴を上げる。ナイフの刃はすぐに扉の外に引込んだ。またも優の頬に激痛が走る。

「助けて！」

優は頬の痛みには耐えながら、携帯で食事に出ている両親に連絡しようとした。だが何者かが部屋に侵入してきた。そいつは血にまみれたナイフを片手に持って、優を部屋の片隅に追いやった。

「やめて！ 近寄らないで！」

ナイフが高々と優の頭上にかかる。

「いやああああっつ！」 ナイフは優の頭に降り下ろされた。

そこで音の正体がわかった。あれは音というよりも声であった。女の笑い声だ。優が先ほどから聞いていたのは、女の笑い声であったのだ。

優が息絶えた後、その笑い声は高らかに鳴り響いていった。

次の日の朝。

優が何者かに殺害されたことが話題になっていた。菜穂はシヨックのあまりろくに朝食が喉を通らず、そのまま学校に出席した。

クラス全員、菜穂のように優の死にシヨックを受けていた。中には涙を流す者も。その1人に真理亜がいた。

全員、尚美が死んだときは反応が真逆であった。

今日は朝のホームルーム終了後、早めの下校となった。後日に優

の葬式が行われるそうだ。

菜穂は真理亜と帰り道を共にしていた。今も尚、真理亜は優のことで涙を流していた。

「大丈夫？」

「うん……」

いつもの真理亜ではなかった。明るさが足りない感じだった。

真理亜とは菜穂の自宅前で別れた。彼女は顔を俯かせたまま、菜穂にうんともすんとも言わず去っていった。

菜穂は自分の部屋に入った後、少しだけベッドの上に仰向けになる。

そしてため息。

すると彼女の携帯電話に着信が入る。相手は隆雄であった。彼女は通話ボタンを押した後、耳に携帯を当てた。

「隆雄くん？」

「……」

声からして彼も友人を失ってショックを受けているようだ。優も同じ部活動で親しい関係で仲が良かった。

「大丈夫なの？」

「ごめん、こっちは初めてで」

無論、尚美は別。

「私も。人が死ぬってこんなに悲しいことなんだなって思ったよ」

「ああ。その通りだよ。とにかく悲しい。そうだ、これからどこかに行かないか？」

意外な言葉に戸惑う菜穂。

「え、どうして？」

「悲しみを乗り越えるには元気になるのが一番だよ」なるほど。

菜穂の頭の中に真理亜の姿がちらついた。

「いいけど、真理亜も呼んでいい？」

「うん、いいよ」

オールレディ

「待ち合わせの時間と場所は？」

「今夜の8時。いつもの公園で集合。それでいい？」 菜穂は承知した。

「じゃあまた後でね」

「おう」

菜穂は彼との通話を切った後、真理亜に連絡を入れた。

第4部 真実

突然、携帯電話の着メロが鳴り出した。「画面に菜穂の名前が映し出されていた。真理亜は通話ボタンを押す。

「菜穂？」

「あ、真理亜。もう落ち着いた？」

「うん……」

真理亜はまだショックを受けていた。身体が崩れてしまうほどの大きさだ。

「何か用？」

「うん。真理亜を元気づけたいと思って夜に一緒に出掛けない？
隆雄くんも来るけど」

真理亜は菜穂の誘いに乗るのか迷った。

「8時までには西公園に集合だけど」

菜穂が私のことを心配しているのか。

真理亜は彼女に感謝した。

「ありがと。でも今日は隆雄くんと楽しんできて」

「……わかった。じゃあまた明日ね」

携帯を閉じた真理亜。

「菜穂……」

菜穂と真理亜は小学生の頃からの付き合いだ。小学生入学のときからずっと一緒であった。よく遊んだし、よく相談し合った。お互いに悲しいことがあれば慰め合うこともあった。

真理亜にとって菜穂は大事な友達だ。

「やっぱり行く」

真理亜は携帯電話の液晶モニターを開けた。メールボタンに指を伸ばす。

「やっぱり行く。8時に西公園で」

メールを送信した後、真理亜は静かに約束の時間を待っていった。

午後7時40分。

約束の時間が近くなってきた。

菜穂は親に、本屋で問題集を買ってくる、と嘘をついて家の外に出た。

集合場所の公園までは歩いて10分もかからない。

先ほど真理亜からのメールで一緒に行くことを聞いて菜穂は喜んでいた。

「真理亜、元気になればいいのにな」

菜穂はとてもウキウキとした気分で公園に向かっていった。

その頃、隆雄は公園近くの公衆電話の前に行った。片手に携帯電話を持って菜穂にメールを送ろうとしていた。

すると彼の背後に何者かがいた。彼はそれに気がついて後ろを向く。

相手の姿を見て言葉を漏らした隆雄。

「お前……」

真理亜は2人よりいち早く公園にたどり着いた。腕時計で時間を確認する。

午後7時50分。まだまだ時間に余裕があった。

「早く来すぎた」

とりあえずベンチに座る真理亜。

すると隣に誰かが座ってきた。真理亜は菜穂かと思って振り向いた。

だが彼女ではなかった。なぜならそいつは真理亜の腕にナイフを刺してきたからだ。菜穂にはあり得ない。

では一体誰が？

彼女の腕から多量の血が吹き出していた。

真理亜はそいつの顔をしっかりと視界に収める。だが彼女の目の

先にナイフの刃が迫っていた。

夜空に真理亜の悲鳴が響いた。

場所は公園からだ。

「真理亜！」

菜穂は全速力で公園に向かう。公園に着くと真理亜は何者かに殺されていた。「そんな……」

真理亜の目にナイフが深く刺さっていた。おそらく脳まで届いているだろう。菜穂は真理亜に近寄り、身体を揺する。だが彼女は2度と起き上がらなかった。

菜穂は今自分の目の前にいる者に怒りを表した。

「よくも真理亜を……」

菜穂は犯人の顔を見て言葉を失う。

「嘘でしょ……」 何と菜穂の前にいるのは、隆雄であった。

隆雄は狂気のみで菜穂を見つめていた。

「どうして？ 何で隆雄くんが？」

隆雄は怒りを混じりながら答えた。

「お前を早く目覚めさせるためだ」

「どういう意味？」

隆雄は不気味な笑顔を浮かべ答える。

「彼女が全てを知っている」

そういつて彼の横に現れたのは、尚美だった。

「尚美」

菜穂は尚美に近寄る。

「どうして真理亜を殺したの！？ 何で優も殺したの？」

「いい加減にしてよ」

菜穂にはこれがどういう意味なのかわからなかった。

「どういう意味？」

すると尚美が妙な質問を返す。

「じゃあさ、あなたは私が誰かわかるよね？」

「ふざけないで！」

「いいから、答えて」

菜穂は腹のそこから沸き上がる怒りと共に言った。「照沢尚美！
あなたの名前は尚美よ！ いつめいじめられていた落ちこぼれよ

！」

「違うよ」

尚美は菜穂の耳元に近寄り、こっそりと秘密をばらすような言い方をした。

「私はあなたの分身なの 尚美という私は存在しないの」

尚美の顔が離れる。

「あなたが存在しないってどういうこと？」

「私はあなたって言うことなの」

菜穂にはわけがわからなかった。尚美は続けて答えた。

「尚美、つまり私はあなたによって想像された人物で、あなたは私のように自殺したの」

「よく意味がわからない」 尚美はクスクスと笑い出していた。

「それもそうよね。本当のあなたはいつもいじめられていた。全員からね。全員。そしてあなたは、1人にいるときで自分が持っている理想を想像の世界で作ったの。それがここ。あなたの頭の中だけの世界だから、何でも想像ができた。だからあなたは昔仲良しの人をこの世界で作りに出し、さらには私も作り出して、想像の世界であなただけの身代わりとなっていた。想像の世界で作った友達と散々私をいじめた。

悲しい話よね？ 想像の世界だけで自分の理想を掴むなんてさ」

ここが私の想像の世界？「もちろん、あなたには恋人はいない。

隆雄くんはあなたの片思いの相手。あなたは隆雄くんにいじめられ
ても平気だった」

そんな。

菜穂は自分の記憶を呼び覚ました。

菜穂は複数の同級生がタバコを吸っているところを目撃し、それを先生に告げ口をしてしまったため、周りからひどいじめを受けるようになる。

主犯は真理亜。昔仲良しだった菜穂を簡単に苦しませた。

だから菜穂は頭の中で自分の理想を作った。

だが現実に耐えることができずに自殺をした。それ以降は自分の想像の世界で生きていたのだ。

それは死んだことに未練があったから。自分が死んだ記憶がなかったのは、未練の現れだ。

しかし疑問が生まれる。なぜ真理亜と優は殺されたのか。

それはすぐにわかった。隆雄が人を殺したのは、菜穂自身がこれからやり遂げたいことを、自分の想像の世界で無意識に作り出していたのだ。

菜穂は全ての真実を知った。いつのまにか目の前の世界が消えた。

そして彼女は霊体となって現実の世界に降り立った。

今、彼女の前には真理亜の家が見えた。

菜穂は怨霊となった。

今までの苦しみを晴らす。

「皆殺してやる」

菜穂は真理亜の家の中に忍び寄った。

気づくと菜穂は外にいた。そして彼女の足元に真理亜の亡骸が横たわっていた。

菜穂は歓喜した。

彼女の復讐がこれより開始された……。

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916e/>

オールレディ

2009年3月24日09時06分発行